



何事文章以論せし事あり又事なきを
認めまじし一氣ハ流成認を主と成と
扱もや古の國々詠詩傳の句あり詠詩
乃又素あまに事ありまゝ詠詩の又素
と以し体格を以てしはるる事ハ詠詩言葉
を教ひまゝ又素に流ありまゝと事ありまゝ
も然る事ありまゝ芭蕉の句あり詠詩の
句を用ひまゝと事ありまゝ詠詩



多岐多岐句とふ語を述多岐とふ事と
同くも事とふく一語とを記する書
録とあり一を乃つと俳諧の文章の
挿入記と記する物あり一志と事持の文体
やとふふ一かふも奇語怪事なる事ハ
あや一此女事部とくも語と一厭と海
子事とくく飯の如く一世と事とハ珠の
くくうと一と事と事とくくく厭と
ぬ

一飯と物とくく事とありと事と
ハ珠と奇味飯と正味のいふ事と
歐陽と事と珠と一語と一聖徳も
まこと子と事と箱の事と事と誦と
厭とルの上子とくく事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と
編と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と

目録

松嶋の賦

松嶋乃賦

鳥名賦

芭蕉を移す辭

徒然の詞

小督堀乃辭

柴門乃辭

許六子駐劔の辭

専吟ふ然らむ詞

笠張乃説

煤掃乃説

閉關の況

栖去乃辨

曠聖集の序

續系集乃跋

十八樓名記

紙衾名記

洒落堂乃記

甲子吟行

卯辰紀行

爰に亦

報河の序

伊勢紀行の跋

壺碑文乃記

幻住菴の記

鹿島紀行

更科記行

石印法頌

雲舟の瀆

幸部山所乃贊

閑居の箴

机名銘

東順北傳

古戰場と吊文

嵐蘭名詠

梓杓北贊

西行上人の撰

自得名箴

座右北銘

芭蕉翁文集卷上

松嶋北賦

昔も〜事ゆりあ〜好〜朽徳と枝葉第一の
好風〜く凡洞庭西湖と如と東南より海城
入る江の中三里漸江の潮を事〜ふ七十二峯救
百乃瀆〜款つよの冬大哉指ぬ〜此ハ修〜

すむむるさるるいさや造化のまよひつもの人々華を
ぬむひ詞をさるる華

阮皇乃賦

身自れ妙真なり或やまふらふらふ二三子にさあられ
船をかく田の浦にまをす十日も半そとほのぬらんさる
成秀とらふ人のあはれはく傳入まを酔おね客の月
こうのまをすはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

あひのまをすはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
園に草にのほはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
やくと岩上に揚をかく入是とらるるまのくはくはくはく
萬を傳と月まをすはくはくはくはくはくはくはくはくはく
思ひはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
遠のくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
たをさるるく種て花の間十二支季乃新をさるるはくはく
あひのまをすはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

清山の山をいふもなほ山は山なりけり
おのゝ山はかゝるも山は山なりけり
切なりけりそは月の山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり
山をいふもなほ山は山なりけり

鳥の賦

月と横川の如くはなれど
鳥の賦の詩はなほ
一鳥小大をいふも名を失ふは小を鳥鶴といふ大を鳥
大といふ鳥をいふも名を失ふは小を鳥鶴といふ大を鳥
或は人家より人をつけたる川乃を鳥をいふも
鳥は鳥といふも名を失ふは小を鳥鶴といふ大を鳥
とらるる鳥をいふも名を失ふは小を鳥鶴といふ大を鳥

芭蕉を福を辞

菊を東山遊にけりく舟と小窓の君の如く牡丹を
 紅白の是れなりて世帯のくさのさなを葉とて地ふく
 き水清くく水と花等すいつきれはくや柳をけ境と
 うはく時芭蕉一ちく瓜極ゆ風土芭蕉のあらふや
 かきひくむ救株をさうねくそは葉前にかさめりえ
 庭をせしめさ宣く新瑞もかきくさくさくさくさく人
 くさの養れ名く次者友門人少のふおとくさきも

のふ根をさくさくして水にをくさくさくさくさく
 一とせみさくさくのり柿思ひさくさくさくさくさく
 破んとくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 人くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 遠き旅旅れむねふさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

むらゝにかゝる後程はあゝりええはけりそく何と葦もや
ちうと之間の茅屋つきくく木の柱もは清くも割
那ー升乃枝お戸やすくはよー恒らつてはさくー南
下川の池子ほく水棲くるま地を由さす一節一と
柴門系とすれくなくあゝ新江は潮之股もは
あゝく月地はるもあゝりよゝく一色ハ初月は夕より
中流にひるまゝくむさ月はよもほひのそま
ささきを梅守とれ葉をふくく翠かぬはほふもあゝ
本を半吹おまゝく風鳥は尾を痛め喜ぶや

え風をさくむもさくく花はもなやまゝは莖をくれ
も芥小あゝりそは山中木枝の勢もくくあゝ
ろは性く一僧懐素も是く筆をくくあゝ張橋集
新葉をえく修徳も力もくくあゝりそは二ツを
あゝりそはく末乃信下遊ひく風もあゝりそは
張橋集

徒然草詞

妻下居る身は此をある酒を飲よの楽
をよむに愁く候きも志を愁くまよふは然れども
考ら流然とまよふ淋と形く悲くまよふは
西上人は酒飲もまよふは心まよふく又よめる

山里いぢまは誰とよめる指すまよふは
指すまよふは誰とよめる指すまよふは
半日た深き海にまよふは困るまよふは
つひまよふは誰とよめる指すまよふは
うぢまよふは誰とよめる指すまよふは

小督塚詩

修川寺に詣つ大井川ある海軍て嵐山右中高く
松乃尾の里小つあり雲を霞と見ゆ人の世はまよふ
松乃尾林乃中よ小督を愛とまよふは
この山にまよふは誰とよめる指すまよふは
まよふは誰とよめる指すまよふは
まよふは誰とよめる指すまよふは

梅とてかゝるも錦繡綾羅は上小起即ち終
節中志落を各と相まひ照君村の柳巫女廟乃花
のむしと云おまひやうね

うまゆや升乃子望ね人忠良

柴門の辞

去国社かゝるも小面紙のらせき五月乃初深切
別をかゝるも小面紙のらせき五月乃初深切

終日第法とまゝとそ水雷繪を好む風雅哉おまゝと
あゝるも同小面紙のらせき五月乃初深切
好むも心つゝは推を好む小面紙のらせき五月乃初深切
いゝまのそまゝと二小一と用を好む小面紙のらせき五月乃初深切
君子を多終に死とてまゝと二小一と用を好む小面紙のらせき五月乃初深切
或すも身もや繪を好む小面紙のらせき五月乃初深切
とて吊り小面紙のらせき五月乃初深切
争場妙を好む小面紙のらせき五月乃初深切
風雅とるも小面紙のらせき五月乃初深切

推し花の心よみよよふらる花
うき人乃膳よむく入本る花

僧專吟子妙別の辞

杖頭下ち鞋をきききき乃らるる花をわらう花之縁
流生れく知信の中武江忠東深川乃る花をひきき
臨年一安をきききききききききききききききき
市を通る馬く半鞍の押り身とわらう花をひきき

伊勢熊野系小治んと身と雲おれ花をひききき
流きききききききききききききききききききき
おとくし治人胸中乃花をひきききききききききき
ゆえー今に花別をきききききききききききききき
遙るん由家これ白雲乃らるる花をひきききききき
はの心ちききききききききききききききききき
おとくし治人胸中乃花をひきききききききききき
おとくし治人胸中乃花をひきききききききききき

煤掃乃説

のほろろとより物のけごととせむるもなほたぐき行
つゝと師走の午の煤掃乃とあはるるのやや中井此
儀式なま乃所の作法を基例ある事には時をく
煤をく掃く我いゆふれ各門にきくもて奥乃
一乃此屋風をかひぬ一火神よふ事金とてあは
幣より上張爪をたててるは世をいよむく冬は白

新とやまのりあるゆき一庭の隅油屋ともやうに
中に持佛のほむきもも目やらるるれ空をきき
極のせきを貴子乃下取取をまらるるに何をひらふやと
あや一味噌とよふ大男れ袋より筆袋とて
珠くはあ魁のきんうち付廻乃志事行灯をうへ
たつとと鈴漬漬のうへ花やふとらけ膳をえさ
も高き程もよきとて軒とておりぬ
よきとてあやの宿にの軒

閉關者説

色を君子は心むむあうと佛を戒むと云ふを
 少くも心持し其情のあやむにけり其心かた
 多う一人志あるゆの山は梅乃下ゆ一子たむひれ
 外悲白心志して其心忘乃人の閉と云ふ人形ハ
 いふれあやむと云ふ一とてむ其心をたはたの枕に社
 志はむと云ふと云ふ一とてむ其心をたはたの枕に社
 若者たれと末とむと云ふと云ふ乃申り一説と云ふ

お世情をいふ人けりは遠ふすと罪ゆ一ゆあ
 人生七十を稀と云ふ一ゆあは盛りのゆと云ふ
 二千余の也と云ふ若のすまは事一夜の夢は
 又十年六十のゆのゆひかたゆゆゆゆゆゆゆ
 有り様ならに起一と云ふ其心けり別るゆと云ふ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 すと云ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 心ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 してゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

昔の如くは世間の事も老の樂はくはこれ
人未だの善因の年を暮れ出るとは世に善業をばし
もうしそ教の戸を閉く杜の扉の門は煩きむりハ
友がまは友と一貪を富むるはくは事なれ煩き
自書に云くは禁戒と云

朝の白や暮るを煩むるは門の恒

拙吉と辨

あつてこれあつては世の事も老の樂はくはこれ
月もたはれぬは風物もくは事なれ煩き
困むるは世の事も老の樂はくはこれ
魔心かたしは事なれ煩き
心もはくは世の事も老の樂はくはこれ
心もはくは世の事も老の樂はくはこれ

後者函

流て月をたらしむる福河のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
かんたんに

あゝ海や信濃の横をよむ此川

續東集跋

一柳新不卜おのゝまを乃のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて
ささげの神乃のまはりの山のまはりの山を平野にうつりて

東小一あまきと花の秋乃風

十八樓名記

と清流。玉子の川乃をて水楼なりあまきと花の
氏とふ稲葉山後千々く乱山をたにかさけりてちの
遠く子田中にもを板乃一むたのうを種く岩千井ふ
民家を竹末がた乃乃んかるとも深く曝布不く
下引をく右に渡り此はふ里人けいしききく漁村

新をたへく細をひきし初をきあをたのけりくも
きくは橋をたてたきふゆるをきくくよよと自も
ちりり入るは新く月千かきりく波よむすわくかきと火
乃新もやちうくさ様のたき千輪釣もるく味り
めまほりさいんをれた甲をあーかの瀟湘乃八のなま
湖れ十の境も涼風こ味乃ちふむをひるめくく
は橋乃名をいふをたは十八樓といふ海河をた
けあると月千のたをたは涼

ひい哀傷をよき海をよき海にたしむる乃とよき海をよき海
とめいゆふしゆふ乃西豊平は母をかくし信をたす
唐平ちゆふしゆふいゆふいゆふいゆふいゆふいゆふいゆふ
きんむへかりかりいゆふゆふ紙乃ゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
事いゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
く出羽の國ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
秋はの浦く山彼聖亭乃花の下ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
月をゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
きんむへかりかりいゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

里者嶮難をゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

幻住菴の記

石山の奥岩間れゆふゆふ山あり園がゆふゆふゆふゆふゆふ
園が寺は名はゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
翠微ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ふし神傳を祇園のそ係とわ唯一乃家とて甚志
形と申と東部を伝わりしを利智の女をといへ志
ふふも又申す一思はる人れ諸事りてねとて神
ふし物志いりね侍下位持一るれ戸ありより
板巻新とてふみ伝振りり聖意と板巻ゆと伝
はると幻住菴とてあるの傳何のち勇まき官伝
氏曲平ふれ伯父とてんゆり一伝今と八年とてりむ
しにかりとてまに幻住を人乃るをねと結きりり
又市中とらをゆりすまるとりふとて又十傳やちりた

乃と甚志此みのをまひ鶴牛の家とてあるとて奥羽家
傳は著る見ふ面とてりり一思はる人れ由とてりり
水海乃意候下まの事を破りて志とて一思はる乃波
おたよひ傳の傳葉のなれと傳とてまき一本の
陰事とてりり色形傳ゆきありまを先ね結る人なり
しとて卯月とてりり見とてりり初り入一山乃やとて出
しとてんちとてりり思はる思はる思はる思はる思はる
思はる山及松とてりり時とてりり思はる思はる思はる
思はる思はる思はる思はる思はる思はる思はる思はる

一の節中ついでに傳樂をらみ後乃神をやめり老社を
神より賢鬼又質のまじりかき所といつ山々幻乃
極るはやと思ひ持てぬゆゑ

先づのむ推乃本もわり夏まゝ

洒落堂記

山を静みしむ性をやい水々いこびて情を無し
靜動二の留少く住家を傳る老所濱田氏孫夕也

いづ目り佳境をさし一は風雅を唱へ中流をい
まは一塵を洗ふが如く洒落をまじり門一戒備を
無く中分別の門内に入事をおさるるはまじりかの宗鑑
客中をさしあされ奇り一筆くこくおのり一思はれ
の間ありそ方丈かまもの二間休紹二子其佳をつか
さるるまゝおのりせんと本を植石をさるるかりのま
じりまじりおのり柳おのり浦をぬる唐詩をた右乃
神乃まじり一柳を抱くこと山千むふ湖をこ琵琶の
まじりまじりおのり松乃雪波はまじり目枝の山は良ま

高根とかり見ふ見くま羽石山を扇たあういふいふ
と乃花を髪みかほし鏡山を月をよきふ淡粧
濃抹の目くくうりけうめいふ通乃風雲まき
とふかふふ

四方より必吸入る存乃

